

史料紹介と研究

東京大学史料編纂所所蔵の琉球関係拓本

高橋 慎 一 朗

東京大学史料編纂所には、二千点にのぼる金石文拓本史料が架蔵されている。そのほとんどは、戦前に研究資源として組織的に収集されたものであり、現在では現物が失われてしまったもの少なくないと考えられ、重要な史料群と言える「菊地一九九九」とりわけ、琉球関係の拓本は、従来はあまり注目されてこなかったとはいえ、戦災によって現物が失われたり損なわれたりしているケースが多いため、戦前の拓本史料の持つ意義は大きいと言える。日本列島のほとんどの地域では、中世には石碑（碑文）文化が見られないのに対し、琉球では例外的に多くの石碑が建立され、とりわけ琉球独自の「かな碑文」も残されていることが注目されている（矢野二〇一七、村井二〇一九）。石碑に限らず金石文拓本は、琉球の貴重な歴史資料であるとともに、復元のための資料としても活用されるようになっており、その意義はますます重要になっていると言えよう（又吉一九八一、川島二〇一三）。

東京大学史料編纂所所蔵の琉球関係拓本は、全部で三十一件が確認でき、それを編年順にまとめたものが（表1）である。沖縄県所在の金石文についての基礎的データとしては、拓本と翻刻を網羅的に収載した『金石文』歴史資料調査報告書V―『沖縄県教委一九八五』が重要である。表1では、右端の欄に「金石文」として、同書における資料番号を記した。ただし、表1の番号6・8・14の三点については、『金石文』では拓本写真が掲載されていないため、空欄としている。この三点については、戦前の良好な拓本が他にはほとんど存在しないと推測されることから、史料編纂所拓本が特に重要

な資料となるであろう。

また、番号28「重修天女橋碑記」は、戦災により下部が破損しており、『金石文』では現存部分の拓本の写真が掲載されている。展示図録『刻まれた歴史―沖縄の石碑と拓本―』（沖縄県博一九九三）は、沖縄の主要な石碑の現況と拓本の写真を掲載するきわめて有用な書籍であるが、同書においても「重修天女橋碑記」の拓本写真は下部の欠けた状態のものである。これに対して、史料編纂所の拓本（図1）は、表裏ともに戦前の完形の状態から採られた拓本であり、資料的価値は極めて高い。

同じく番号30「重修真玉橋碑文」も、戦災により原碑が破損したため、『金石文』では残欠部分の現状拓本が掲載されている。石碑復元にあたり、台湾大学所蔵の戦前拓本のコピーを参照された由であるが「又吉一九八一」、30はより原形に近いデータと言えるのではなからうか。

そのほか、番号23「琉球浦添城前碑文」も戦災で破損しており、『金石文』は沖縄県立図書館蔵の戦前拓本を載せているが、すでに摩滅が進んでいたらしく判読困難な部分も多い。よって、史料編纂所拓本も採用することが、碑文の確定において有効と考えられるのである。

番号9はいわゆる万国津梁鐘として著名なもので、沖縄県立博物館に現存している。ただ、『金石文』所収の現物拓本と比較すると、当然ではあるが、史料編纂所拓本は字画がより明瞭で、戦前拓本によって細部が確定される点はいくつかあるとみられる。参考までに、第三区の写真を掲げておく（図2）。

全般的にみても、史料編纂所の戦前の拓本と、沖縄県立図書館の東恩納寛惇文庫や沖縄県立博物館、さらには台湾大学などに所蔵される戦前の拓本とを比較検討することによって、より正確な碑文や原形の復元が可能となると思われる。

続いて、表1の拓本が史料編纂所の所蔵となった経緯について、以下で考察してみることにしたい。

まず、表1にあげた三十一件のうち、番号17・19を除く二十九件は、昭和

表 1

番号	架蔵番号	史料名	年月日	和暦	西暦	備考	金石文
1	拓本-1878	朝鮮鐘銘	顯徳3年大歳丙辰正月25日	天曆10	956	波上宮旧蔵、残欠	222
2	拓本-1879	琉球相国寺鐘銘	景泰7年歳次丙子9月23日	康正2	1456	亡失	216
3	拓本-1880	琉球天尊殿鐘銘	景泰7年丙子9月23日	康正2	1456		202
4	拓本-1881	琉球天龍寺鐘銘	景泰7曆丙子小春(10月)吉日	康正2	1456		203
5	拓本-1885	琉球天妃宮鐘銘	景泰丁丑年(8年)朔旦	長禄元	1457		207
6	拓本-1882	琉球潮音寺鐘銘	天順元年6月19日	長禄元	1457	天久寺旧蔵、亡失	-
7	拓本-1883	琉球万寿寺鐘銘	天順元年10月吉日	長禄元	1457	亡失	217
8	拓本-1884	琉球魏古城鐘銘	天順元年12月9日	長禄元	1457	亡失	-
9	拓本-1886	琉球中山国王殿前鐘銘	戊寅6月19日辛亥	長禄2	1458	万国津梁之鐘	210
10	拓本-1887	琉球一品権現(冲宮)鐘銘	天順3年3月15日	長禄3	1459	臨海寺旧蔵、県博現蔵	211
11	拓本-1888	万歳嶺記碑文	大明弘治10白龍舎丁巳仲秋(8月)之吉旦	明応6	1497	残欠	223
12	拓本-1889	官松嶺記碑文	大明弘治10年龍集丁巳南呂(8月)吉日	明応6	1497	残欠	224
13	拓本-1890	国王頌德碑文	大明弘治11年歳次戊午8月吉日	明応7	1498	円覚寺旧蔵、残欠	226
14	拓本-1891	円覚寺松尾之碑文	大明弘治14辛酉林鐘上澣日(6月上旬)	文亀元	1501	亡失	-
15	拓本-1892	大道(サシカヘシ)松尾碑文	大明弘治14曆辛酉林鐘上澣日(6月上旬)	文亀元	1501	亡失	227
16	拓本-1893	真珠湊碑文	嘉靖元年みつのへむまのとし4月9日	大永2	1522	残欠	229
17	拓本-846	琉球真珠湊碑文	嘉靖元年みつのへむまのとし4月9日	大永2	1522	残欠、秋山謙蔵送付	229
18	拓本-1894	琉球国王頌德碑文	大明嘉靖元年壬午12月吉日	大永2	1522	残欠	228
19	拓本-845	国王頌德碑銘	大明嘉靖元年壬午12月吉日	大永2	1522	残欠、秋山謙蔵送付	228
20	拓本-1895	王舅達魯加祢國柱大人寿蔵之銘	嘉靖4稔乙酉2月21日	大永5	1525		110
21	拓本-1896	崇元寺前下馬碑文	大明嘉靖6年丁亥7月25日	大永7	1527	西の碑残欠	51
22	拓本-1897	広徳寺浦添親方塚碑文	万曆25丁酉8月14日	慶長2	1597	所在不明	231
23	拓本-1898	琉球浦添城前碑文	万曆25年ひのとのとり9月大吉日	慶長2	1597	残欠	232
24	拓本-1899	中山孔子廟記碑文	康熙55年歳次丙申12月望跡2日	享保元	1716	残欠	234
25	拓本-1900	琉球国新建儒学碑記文	康熙58年歳次己亥10月之望	享保4	1719	残欠	236
26	拓本-1901	中山第一碑文	康熙己亥(58年)冬至(11月7日)	享保4	1719	竜樋之碑、亡失	235
27	拓本-1902	与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑文	乾隆32年丁亥9月吉日	明和4	1767	残欠	240
28	拓本-1903	重修天女橋碑記	嘉慶3年戊午季冬(12月)穀旦	寛政10	1798	残欠	46
29	拓本-1904	琉球国新建国学碑文	大清嘉慶6年歳次辛酉陽月(10月)穀旦	享和元	1801	亡失	237
30	拓本-1905	重修真玉橋碑文	道光17年丁酉5月穀旦	天保8	1837	残欠	62
31	拓本-1906	首里新建聖廟碑文	大清道光17年歳次丁酉12月上旬	天保8	1837		48

十六年(一九四一)に比嘉朝健から購入したものである。比嘉朝健は、那覇出身の戦前の琉球美術研究者で、かの鎌倉芳太郎とも接点があったと考えられている人物である。朝健の父次良は、那覇士族の末裔であり、尚順(琉球国王尚泰の四男)とも交流のある有力な実業家であった[粟国二〇〇八、与那原二〇一六]。

実は比嘉は、上京して、昭和二年(一九二七)から昭和六年(一九三一)まで、東京大学史料編纂所(昭和四年までは史料編纂掛)に「史料編纂掛雇」として在籍していたのである。採用年の昭和二年には、高柳光寿が史料編纂官を務める第十一編部(豊臣期)の所属であったが、翌三年から五年までは「琉球史料調査」担当となっていたことが知られる[東京大学史料編纂所二〇〇一]。豊臣政権は琉球の服属を求め、両者の間には緊迫したやりとりがなされていた。そのため、該当期を担当する第十一編部の関心から琉球史料の調査が当初は求められたものと思われる。それが、翌年からは範囲を広げて琉球史料一般の調査となったのであろう。比嘉の史料編纂所における最終年・昭和六年には、再び第十一編部所属に戻っているが、彼の関与する琉球史料調査が一段落したということであろう。

比嘉はその後も東京を中心に研究活動を行っていたと思われるが、史料編纂所が拓本を購入した昭和十六年ごろの動向は不明で、昭和二十年に四十七歳の若さで亡くなっている。いづれにせよ、かつての職場という縁で、拓本を史料編纂所に売却することになったのであろう。比嘉の那覇の実家には、尚家旧蔵品を含む琉球の絵画・工芸品が多く所蔵されており、鎌倉芳太郎が調査に赴いたこともあった。拓本類も、そうしたコレクションのなかの一部だったのかもしれない。

史料編纂所における琉球史料調査については、一九〇〇年代初頭の三上参次による内務省所蔵史料の調査、一九二〇年代の尚家所蔵史料調査があり、いづれも三上の大学の教え子であった東恩納寛惇が介在した可能性があることが指摘されている[黒嶋他二〇一七]。東恩納は尚順とも交流があったことから、比嘉の史料編纂所就職についても、比嘉・尚順・東恩納というライ

ンで話が進んだのではなからうか。

次に、番号17・19について述べる。この二件は、昭和五年（一九三〇）六月に秋山謙蔵から送付されたものである。秋山は『日支交渉史研究』などの著書がある対外関係史の研究者で、琉球貿易に関する業績も知られている。秋山は昭和三年（一九二八）に東京帝大文学部国史学科を卒業し同大学院に入学しており「日本歴史学会一九九九」、拓本が送付された昭和五年当時はまだ大学院生だったとみられるが、すでに琉球関連の論文も発表しており、何らかの手段で拓本を入手したものであろう。拓本が史料編纂所に送付された経緯は不明であるが、当時はまさに比嘉朝健が史料編纂所に在籍していた時期であり、両者の間に接点があった可能性もあるが、想像の域を出ない。

ところで、実際に採拓をおこなった人物は誰であったのだろうか。比嘉にしても秋山にしても、みずから拓本を作成したことは知られていない。いっぽう、戦前の昭和初期に久場政用夫妻が沖縄中の碑文・彫刻の採拓をおこなった、その際の拓本が沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫・沖縄県立博物館・台湾大学に残されているもの、といわれている「又吉一九八一」。

また、表1の番号6「琉球潮音寺鐘銘」は、『金石文』では坪井良平著『日本古鐘銘集成』を典拠としているが、同書は「東恩納寛惇氏所蔵、久場政用氏拓本」に依拠したことが記されている。「坪井一九七二」。『日本古鐘銘集成』は琉球鐘の銘を多く収載するが、6のほかにも三点が「東恩納寛惇氏所蔵、久場政用氏拓本」を典拠としている。

さらに、昭和七年（一九三二）には、久場と佐久原好信の共編で『琉球金石総覧』なる小冊子も刊行されており、久場の採拓活動の時期と、秋山が拓本を送付した時期・比嘉が史料編纂所に在籍した時期がほぼ重なると思われる。

以上より、史料編纂所の拓本も、久場政用の手によるものという可能性があるが、現在のところ詳細は不明であり、より一層の検討が必要である。

なお、本稿で取り上げた琉球拓本を含む史料編纂所の拓本類は、科学研究費補助金による研究「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合

的歴史叙述への応用研究」（基盤研究A・代表菊地大樹）によって、写真のデジタルデータ化と研究が進められており、本稿も同研究の成果を利用させていただいた。記して謝意を表すとともに、今後の研究の進展に期待するところである。

*参考文献

- 栗国恭子 二〇〇八「近代沖縄の芸術研究②―鎌倉芳太郎と比嘉朝健・琉球芸術研究の光と影―」『沖縄芸術の科学』二〇号
- 沖縄県教育庁文化課編 一九八五『沖縄県文化財調査報告書第六十九集 金石文―歴史資料調査報告書V―』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立博物館編 一九九三『刻まれた歴史―沖縄の石碑と拓本―』沖縄県立博物館友の会
- 川島 淳 二〇一三「那覇市歴史博物館所蔵の拓本資料の整理について―目録記述を軸として―」『壺屋焼物博物館紀要』一四号
- 菊地大樹 一九九九「東京大学史料編纂所の金石文史料研究」『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』七号
- 黒嶋 敏・屋良健一郎 二〇一七「序言―船出にあたって―」黒嶋・屋良編『琉球史料学の船出―いま、歴史情報の海へ―』勉誠出版
- 坪井良平 一九七二『日本古鐘銘集成』角川書店
- 東京大学史料編纂所編 二〇〇一『東京大学史料編纂所史料集』東京大学史料編纂所
- 日本歴史学会編 一九九九『日本史研究者辞典』吉川弘文館
- 又吉真三 一九八一「琉球の金石文と拓本」『わざ』創刊号 沖縄県文化財修理技術者協会
- 村井章介 二〇一九「かな碑文に古琉球を読む」『古琉球―海洋アジアの輝ける王国―』角川選書（初出二〇一七年）
- 矢野美沙子 二〇一七「古琉球期の仮名碑文に関する一考察」『史観』一七七号
- 与那原恵 二〇一六『首里城への坂道―鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像―』中公文庫



「重修天女橋碑記」(裏) 史料編纂所拓本



図1 「重修天女橋碑記」(表) 史料編纂所拓本

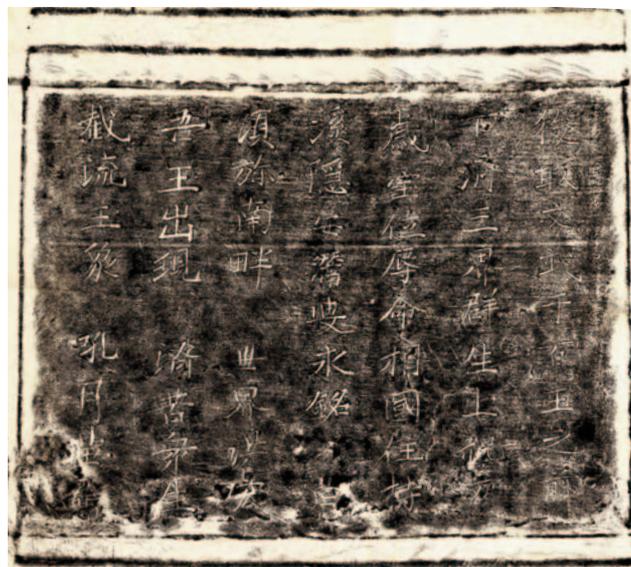


図2 「琉球中山国王殿前鐘銘」(部分) 史料編纂所拓本